Bactriane のギリシア諸王の一層根強い征服を思ふだけでは足りないので、更に、紀元前三世紀中葉から、阿育王時に、犍陀羅 Gandhāra 及び迦濕彌 Kashmir (罽賓)兩國が、傳教僧末田地 Madhyāntika に依つて教化せられ、「國中金色の堂と佛僧の衣とで輝いた」と佛典が傳へてゐる程功を收めた事情を回想すべきであらう。之に依つてのみ、地中海岸から來たギリシア文明が、恒河の下流で之を距る三百里の地に生れた佛教と、オクサス Oxus 河とインダス Indus 河との間の地點で如何して出會したかを知るのである。

之が第一の點であるが、次の點も、抽象的に言葉だけで以てする譯にはゆかない。ギリシア文明といひ、佛教といふ如き二個の抽象が出會つた所で、單に之のみで、形像の樣な具體的な物を產んだ事は嘗てなく、之には、あらゆる宗教美術に於ける如く、彫刻家と、贈與者と、この兩者の間に行はれた注文と、――之は、年代の問題を述べる時に、觸れざるを得ない點であるが、――此の三者を豫想してゐる。今の場合では、贈與者は佛教徒たらざるを得ないのであり、且つ、之が元來印度に出た以上、印度人であつたとするよりも眞